

カラーピーマンの接ぎ木栽培に関する研究  
接ぎ木と白色不織布マルチが生育及び収量に及ぼす影響

○篠原陽子・野崎克弘・黒木利美  
(宮崎総農試)

【目的】

近年、ピーマン類における青枯病や疫病、ウイルス病等の土壌病害抑制のため、抵抗性台木を利用した接ぎ木栽培の普及が急速に進んでいる。ピーマンでは接ぎ木をすると、自根栽培に比べ草勢が弱くなり減収することが分かっているが、カラーピーマンについては知見が少ない。そこで、カラーピーマンにおける接ぎ木及び白色不織布マルチが生育及び収量に及ぼす影響を検討した。

【材料および方法】

供試品種は穂木に‘シグナル’台木に‘みやざき台木3号’（以下‘台木3号’）を用いた。播種は‘台木3号’を2012年7月26日‘シグナル’を7月29日、自根区（対照区）は8月8日に行った。接ぎ木は8月15日午前中に断根チューブ接ぎを行い、発砲スチロール内で養生後、同日午後50穴セルトレイに挿し木し、8月21日に12cm黒色ポリポットに鉢上げした。9月18日に定植し、マルチ区は定植直後からデュポン社製のタイベック700AGでマルチした。

【結果および考察】

定植直後の生育は、接ぎ木区の草丈が高かったが、主枝節数、主枝葉数、主幹茎径に有意な差は

認められなかった（データ略）。

定植後の生育初期については、主枝長と主枝茎径で有意な差は認められなかったが、主枝節数ではマルチ区で多くなり、マルチ無し接ぎ木区は対照区と同等であった（第1表）。

接ぎ木については、対照区に比べマルチ無し接ぎ木区は収量が少なく、特に11月でその傾向が顕著であった。一方、マルチ有り接ぎ木区も11月の収量は低かったものの、12月から2月までの月別収量は2割以上増収し、3月以降も対照区と同等又は増収で推移した（データ略）。

マルチ被覆の効果については、対照区よりもマルチ両区（マルチ有り自根区・マルチ有り接ぎ木区）でA品率、可販率、総収量が多かった。マルチをすることにより、自根栽培では約1割増収した。接ぎ木栽培では、マルチ無し接ぎ木区に比べ約3割増収し、マルチ有り自根区と同等の収量を示した（第2表）。

以上の事から、カラーピーマン接ぎ木栽培において、白色不織布で定植直後からマルチすることにより、自根と同等の収量が得られることが分かった。

第1表 生育初期(11月2日 接ぎ木後79日目)

	主幹				主枝			
	主幹長(cm)	節数	節間長(cm)	茎径 <sup>z</sup> (mm)	主枝長(cm)	節数	節間長(cm)	茎径 <sup>z</sup> (mm)
マルチ無し自根	28.6 b	8.8	3.3	10.7	92.7	10.1 b	9.2	5.1
マルチ無し接ぎ木	33.8 a	9.0	3.8	9.8	89.1	9.6 b	9.3	4.9
マルチ有り自根	29.4 b	8.7	3.4	11.0	84.4	10.7 a	7.9	5.2
マルチ有り接ぎ木	31.0 ab	9.1	3.4	10.6	86.2	10.5 a	8.2	5.1
	**	n.s.	—	n.s.	n.s.	**	—	n.s.

数値は平均値(n=10, 40)。z:主幹の茎径は第1分岐直下を測定した。y:主枝の茎径は5節と6節の間を測定した。一元配置の分散分析により\*\*は1%、\*は5%の危険率で有意差があり、n.s.は有意差なし。同一アルファベット間に有意差なし(Tukey, p<0.05)。

第2表 収量(2012年11月19日～2013年5月31日)

	A品			可販果			総収量		
	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	率 (重量%)	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	率 (重量%)	果数 (個/a)	重量 (kg/a)	率 (重量%)
マルチ無し自根	8,519	565	81	8,657	576	82	12,083	698	100
マルチ無し接ぎ木	7,833	517	84	7,991	526	86	10,546	614	88
マルチ有り自根	9,361	629	82	9,509	639	83	13,120	767	110
マルチ有り接ぎ木	9,528	662	83	9,676	671	84	13,093	796	114